



愛郷無限

2015年2月8日号 NO.507

写真提供:大田市

土屋館  
どやだて  
通信

発行者：大曲・花火通り商店街  
文責：辻

お問い合わせ：080-1265-7035  
tuck-t@akita-tsujiya.jp

## Subject：沖縄県浦添市【屋富祖通り会】とのお縁

私達が【ひなび大曲LLP】を設立して「映画制作で地域ブランドづくり」に取り組んでいることは既報の通りですが、全く同じ手法を考え、準備に取りかかっている沖縄県浦添市（うらそえし）の商店街【屋富祖通り会（やふそとおりがい）】の皆さんが、何と！わざわざ大曲まで私達の活動を視察に来てくれました（1月27～28日）。

このご縁を取り持ってくれたのは、沖縄県名護市で街を挙げて制作された映画「がじまる食堂の恋」をサポートしたチームで、今回の私達のプロジェクトでは彼らから指導・ノウハウ提供・業務サポートを受けています。

浦添市は沖縄第4の街で、琉球王朝発祥の地だそうです。太平洋戦争末期には市民の半分以上が戦争の犠牲となり、残り半分も米軍の捕虜になった辛い歴史があるそうです（当時は村）。日本の北と南、南国沖縄から寒い寒い大曲へよくぞ来てくれました。

花火通り商店街の視察もした上で、ひなび大曲の地域ブランドづくり検討会に参加いただき。私達のワークショップへ一緒に加わって両地それぞれの地域ブランド作りの検討をしました。沖縄と大曲、事情は全く異なります。浦添市は那覇市の隣に位置する人口11万人のベッドタウンで、同時に米軍基地の街。屋富祖通りの商店街は昔は映画館が4軒もあるほど栄えていた通りですが、イオンなど国道沿いに大型ショッピングモールが林立し、日中はとても閑散としてしまったそうです。それに対して夕方～夜になると基地で働く人達が立ち寄り飲食店が賑わっている状況。このままでは夜しか店が開かない通りになってしまうとの危機感から、通りの商売にはほとんど関係の無い内装糺会社の社長、イベント司会業、市長の私設秘書等の若手皆さんが中心となって、日中から住民が憩い・集える場所にすべく、魅力をアップして市外からも人を呼べるように活動しているそうです。

勉強会終了後は夜もしっかりと懇親を深めました。これからは互いに情報交換、切磋琢磨していこうと誓い合いました。大曲に先んじてこと一ヶ月、【「地元映画制作」の本意を市民・行政に知ってもらうためのシンポジウム】を開催したそうです。沖縄タイムズに掲載されたその記事を送ってくれました。文末には大曲の花火通り商店街を視察に行くこともしっかりと書いてくれています。

沖縄の米軍基地問題は紆余曲折し混沌としています。日本の安全保障を左右する大きな問題である一方で、基地によって生計を立てている人達が沢山いるのも事実。歴史的な経緯と地政学的な問題、政府vs県民・地元、様々な要素が絡み合っ、本当に難しい問題なのだと思います。しかしまずは感心を持ち、キチンと知ること。せっかくご縁をいただいたのだから、互いに学び合っていく関係を作りたいと思います。

# 沖 縄 タ イ ム ス

2015年(平成27年) 1月29日 木曜日

## 映画のまちへ準備着々

### 浦添・屋富祖通り会



映画を使ったまちおこしについて語り合う渡邊竜一さん(左)とパネリスト=24日、屋富祖公民館

【浦添】かつて映画館が4軒もあった屋富祖通りに、映画を使ってもう一度にぎわいを取り戻せないか。地域発の映画作りに向け、屋富祖通り会が着々と準備を進めている。理想は、ロケ地巡りや映画関連商品の販売による経済活性化。名護が舞台の映画「がじまる食堂の恋」(2014年9月公開)もヒントにしながら、機運を盛り上げていく考えだ。

(浦添西原担当・平島夏美)

屋富祖通り会(眞栄田健作会長)は昨年、屋富祖公民館で映画上映会を3回開いた。第1弾はシニア層をターゲットにした石原裕次郎主演の「嵐を呼ぶ男」、第2弾は30〜40代向けにジャッキー・チェン主演のアクション映画「ツインドラゴン」、最後は10代向けの「オキナワノコワイハナシ3D」を選んだ。入場券は、通り会の店舗内で配布する方式。普段入らない店に足を運んでもらうと

## 地域住民の心 結束が鍵



同時に、「屋富祖イコール映画」のイメージづくりに取り組んだ。

「がじまる食堂の恋」など県内外で映画によるまちおこしを手掛けてきたアジア・メディア・プロモーションの渡邊竜一さんは、「地域発の映像が『うちには何もない』という住民意識を変える」と話す。

たとえば、韓国ドラマ「冬のソナタ」の影響で、韓国を訪れる日本人観光客は7カ月間で18万人増えた。香川県小豆島は映画「二十四の瞳」の上映後、年間24万人が訪れる島に変わった。徳島県上勝町が舞台の映画「人生、いろいろ」では、葉を収穫して料理の彩り用に出荷するお年寄りの「葉っぱビジネス」が脚光を浴び、いったん地元を離れた後に戻ってくる「Uターン」や都市部から地方へ移り住む「Iターン」が増え

たという。渡邊さんは、映像作りの秘訣として、①地域に呼び込みたい客のターゲットを絞るの作品に盛り込む「その町らしいスポット」を決める「などの事前準備をした上で、全国のプロに作品を公募する手法を提案する。出来上がった作品の権利を映画製作会社に譲らず地域に残すことも重要だという。

「がじまる食堂の恋」では、多くの地域住民が出演できる場として名護さくら祭りのシーンを盛り込んだといい、「地域住民のベクトルを一つにすることがまちづくり成功の鍵になる」と呼び掛ける。

屋富祖通り会は今、屋富祖のアップルポイントなどを再考するアンケート結果(500部)を分析中。内閣府の2015年度地域商業自立促進事業に採択されるよう交渉している。将来的には有限責任事業組合(LLP)を立ち上げることで、作品中で紹介する特産品の開発などにも取り組みたいという。

1月下旬には都内の戸越銀座銀六商店街や秋田県の花火通り商店街を視察予定。屋富祖通りの魅力掘り起こしに向け、真剣勝負が続いている。